

令和4年度 報告書

2022年9月14日(Wed.)～9月22日(Thu.)

東京大学文学部夏期特別プログラム

Report on the Special Summer Program of the University of Tokyo Faculty of Letters,
September 14-22, 2022 in Hokkaido

知床オシンコシンの滝



目次

1. 巻頭挨拶	
「プログラムを通じての関係構築への期待」	
東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長 秋山 聡	2
2. サマープログラムの概要	3
3. プログラム実施内容	4
4. 受講者レポート	
① 日誌形式レポート	7
QING Xin	【教養学部4年】
CHUA Sherrrene	【教養学部1年】
GUAN Yifei	【教養学部1年】
YIP Ren Wei	【教養学部1年】
VOGT Alexander Bob	【教養学部3年】
② テーマ別レポート	12
菊池 悠真	【教養学部1年】
佐藤 諒	【教養学部1年】
鈴木友芽子	【文学部4年】
平井 雄基	【法学部3年】
福田 ゆい	【教養学部2年】
5. 総括	
第8回夏期特別プログラムを終えて	
東京大学大学院人文社会系研究科・准教授 松田 陽	16

1 巻頭挨拶

プログラムを通じての関係構築への期待

1960年代に「何でもみてやろう」（小田実）、あるいは「書を捨てよ、町に出よう」（寺山修司）と言った言葉が流行しました。若者が座学ばかりを重視する傾向に警鐘を鳴らし、諸々の体験の大切さを知らしめようとしたこうした言葉は、その後も折に触れ、繰り返し唱えられましたが、現実には、大学生の多くは、今もなお、日々机に向かった勉学に追われがちです。10年あまり前、本学で「体験活動プログラム」が開始されたのは、(ヤワな?) 東大生をよりタフに、よりグローバルにしたいという先々代の総長濱田純一先生の願いが発端でした。このプログラムも、元々は本学の学生5名と、ヨーロッパの学生5名による、国際的な体験活動プログラムとして創出されました。新型コロナウィルスの蔓延により一時中断された後、海外からの学生の代わりに本学の留学生に参加してもらう形で再開しました。今回でこの新しい形での2回目の催行となります。あくまでも個人的な意見ですが、今の形も存外、悪くない、と思っています。

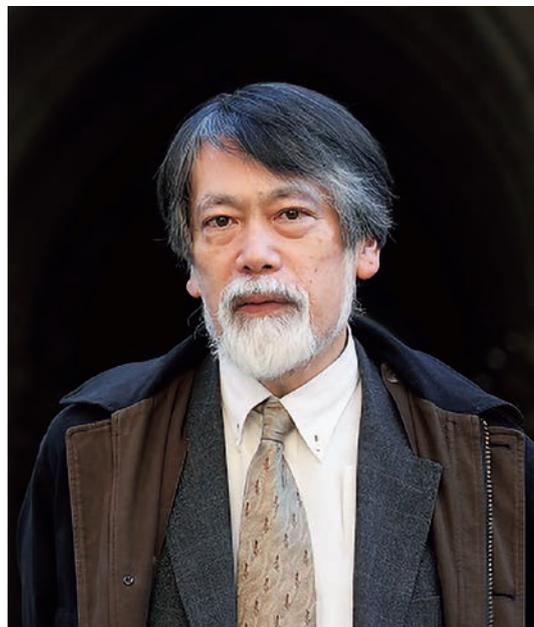
かつて5年余りドイツに留学していた頃の記憶を手繰り寄せてみると、留学生同士が比較的容易に仲良くなれるのに対して、ドイツ人の友人を作るのに存外苦労したことが思い出されます。本学においても、似た

ような傾向があるように見受けられます。その点、このプログラムでは、一般学生と留学生との垣根を、比較的容易に取り払ってくれる機会が与えられます。「同じ釜の飯を食う」ということわざがあるように、何日間か寝食を共にすることによって、人と人の絆は強くなり得ます。毎日毎日ただ教室で出会って、授業の前後に話をするだけではなく、朝から晩まで行動を共にして、同じものを食べ、同じ場所で寝ることのもたらす効果は、特に人間関係構築と言う点では、計り知れないものがあります。しかも、留学生諸君も、本プログラム終了後も、キャンパスで勉学を続けるわけですから、ただある時にある場所で一度だけ一緒に過ごし、すぐに遠く離れて行くわけではありません。本プログラムで生まれる仲間意識は、その後も本学のキャンパスにおいて引き続き保たれうるわけです。コロナ禍による弥縫策の思わぬ余波かもしれませんが、ぜひ、キャンパスでも積極的かつ継続的にコミュニケーションを取り続けて貰えればと念じています。

末尾になりましたが、本プログラムの企画・運営に関わってくださった教職員や地元関係者のみなさまに篤く御礼申し上げます。

東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長

秋山 聰



2 サマープログラムの概要

実施期間	● 2022年9月14日(水)～9月22日(木)
内 容	● 9月14日 プログラムの趣旨説明・ガイダンス(本郷キャンパスにて) ● 9月15日～9月22日 大学院人文社会系研究科附属常呂実習施設(北海道北見市常呂町)でのプログラム ・北海道の先史文化概説(講義) ・北見市、網走市、湧別町、斜里町周辺の遺跡、博物館の見学 ・世界自然遺産知床の見学 ・勾玉製作体験 ・「奈良からストーンヘンジへ：考古学と文化遺産における比較アプローチ」(講義)
担当講師	● 熊木 俊朗(大学院人文社会系研究科 教授) サイモン・ケイナー(セインズベリー日本藝術研究所長)
募集方法等	● 2022年4月に文学部より告知。選考後、6月中旬に通知。
受講者	● 本学の学部学生10名【前期課程学生6名、後期課程学生4名】(うち留学生5名)
支援者 (プログラムに同行)	● 太田 圭(大学院人文社会系研究科 助教) 夏木 大吾(大学院人文社会系研究科 特任助教) 池山 史華(大学院人文社会系研究科博士課程大学院生)
協力	● 北見市教育委員会等

3 プログラム実施内容



世界遺産 知床見学（知床五湖にて記念撮影）

今年度の東京大学部夏期特別プログラムは、東京大学に在籍する学部生5名と外国人学部留学生5名を対象に実施された。また、例年は東京の部と常呂の部で構成されていたが、コロナ禍以後は期間を短縮し、常呂のみでのプログラム催行となった。プログラムの実施にあたっては、新型コロナウイルス感染症の影響を考慮し、プログラム開始前から参加学生および教職員の体調管理報告や抗原検査を行うなど、十分な対策をとりながら準備が進められた。初日の開講式およびガイダンスでは秋山聡研究科長および座長である松田陽准教授が受講者を歓迎し、プログラムの趣旨説明を行った。その後、受講者たちが英語で自己紹介を行い、各人の抱負を語った。二日目以降は、北海道に移動し、人文社会系研究科の附属施設である常呂実習施設で北海道の歴史遺産と自然遺産について体験的に学んだ。受講者たちは附属の学生宿舎に泊まりながら課題をこなし、フリータイムや自炊の時間を通じて受講者同士や参加スタ

ッフとの交流を深めた。プログラム期間中は雨天の日が多く、それにより一部の予定変更も生じたが、概ね予定どおりプログラムは進行した。最終日には各受講者がレポートを提出し、担当講師から修了証の授与がおこなわれた。

● 北海道の先史文化概説（講義）

常呂でのプログラムは、「北海道の歴史遺産と自然遺産について体験を通じて学ぶ」ことを主眼としている。プログラム全体への理解を深めるため、熊本俊朗講師が「Prehistory in Hokkaido」と題し、北海道の先史文化の概要について講義をおこなった。本州とは異なる歩みをみせる北海道の先史文化の特徴について、旧石器時代から縄文、続縄文時代、オホーツク・擦文文化、そしてアイヌ文化の成立に至る考古学的な歴史の流れを、本州やロシア極東との交流・影響関係にも注目しながら順を追って紹介した。専門性の高い講義内容ではあったが、受講者



開講式（法文2号館でのガイダンス風景）



常呂実習施設での考古学座学



常呂実習施設周辺の遺跡見学（ところ遺跡の森にて担当講師の解説を受ける参加者）

からは、先史時代の生活や精神文化に関して活発な質問がなされ、北海道における独特な先史文化に対する関心の高さがうかがわれた。

● 勾玉の製作体験

縄文時代の勾玉を実際に製作する体験を通じて、古代のモノづくりに対する理解を深めた。題材としたのは常呂の遺跡から出土した縄文時代のヒスイ製の勾玉で、実際の製作では加工しやすい滑石を材料とした。各受講者は滑石に好きな勾玉の形を転写した後、約2時間かけて手作業で削って磨きをかけ、1個の勾玉を完成させた。また、製作作業にあわせて、当時の加工技術や原材料と製品の流通についても熊本講師から説明がなされた。講師から当時の原材料であるヒスイを加工する場合には滑石よりも遙かに労力を必要とすることが説明され、受講者は、縄文時代の技術と、勾玉の「威信材」としての価値について体験的に学ぶことができた。



勾玉の製作体験

● 実習施設周辺の遺跡見学

実習施設の周辺には、国指定の史跡「常呂遺跡」を中心として大規模な先史文化の遺跡が数多く存在している。このうち、史跡「常呂遺跡」のところ遺跡の森地点を見学し、遺跡の保護と活用に対する取り組みを実例で学んだ。遺跡では、地表面に窪みで残る竪穴住居跡や、復元された竪穴住居等を見学した。また、隣接する東京大学常呂資料陳列館やところ遺跡の森で実際の遺跡出土品を観察することで、当時の生活をより具体的に知ることができた。遺跡の現状と周辺の景観を実際に見ることで、歴史遺産を体感し、地域における歴史の歩みを深く理解することができた。

● 世界遺産 知床見学

世界遺産に登録されている知床を訪れ、自然遺産への登録理由となった多様な生態環境とその相互関係、豊かな生産性という特質を実見するとともに、自然の保全と人の利用との両立を目指す保護と管理



世界遺産 知床見学
（斜里町立知床博物館にて担当講師の解説を受ける参加者）

3 プログラム実施内容

のあり方についても学んだ。斜里町ウトロまでの行程を含む移動は全て車で行き、斜里町立知床博物館、知床世界遺産センター、知床峠、知床五湖、オシンコシンの滝といった主要地点を巡回した。受講者は火山、森林、湖沼、断崖などの多様な景観に触れながら、それらの具体的な保護管理の方法を現地で視察した。当日の知床は好天に恵まれなかったが、それでも知床五湖やオシンコシンの滝では美しい海や山々の自然を望むことができ、参加者はその雄大な自然を体感することができた。

● 博物館見学

東大常呂実習施設の近隣に位置する各博物館、具体的には、ところ遺跡の館（以上北見市常呂町内）、網走市立郷土博物館、モヨロ貝塚館、北海道立北方民族博物館、博物館網走監獄、美幌博物館、湧別町立郷土博物館ふるさと館 JRY を見学した。これらの館はいずれも地域の特色ある歴史や文化を紹介した博物館であり、受講者は考古学・民族・近代資料や歴史的建造物を見学しながら、地域の歴史遺産について理解を深めた。参加者は各館において北海道の歴史・自然・民族を活かした特色ある展示を熱心に見学し、当時の生活技術や社会的背景について活発に議論する姿も見受けられた。

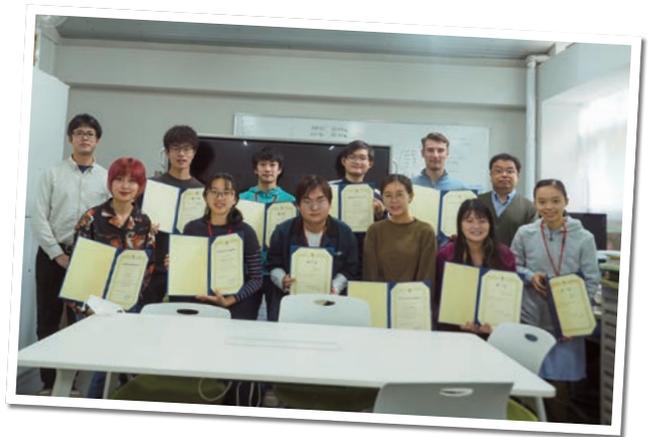


博物館見学（網走市モヨロ貝塚館にて担当講師の解説を受ける参加者）

● 奈良からストーンヘンジへ：考古学と文化遺産における比較アプローチ

セインズベリー日本藝術研究所のサイモン・ケイナー所長を講師として招き、“NARA TO STONEHENGE: Some thoughts on comparative approaches

in archaeology and cultural heritage — and how heritage improves wellbeing” と題した講義が行われた。冒頭では、講師がイギリスで取り組む「Later Prehistoric Norfolk Project」を紹介し、人が豊かに生きるための歴史遺産の活用と役割について、その枠組みを分かりやすく説明した。講義では、初期におけるストーンヘンジの科学的研究、日本における先史考古学研究の成り立ちや歴史遺産への取り組み、日英の先史文化の比較研究について解説された。受講者は、歴史遺産の活用に関する具体的な実践例を知ることによって、社会における歴史遺産の役割や普遍的意義などについて学んだ。



修了式（常呂実習施設にて集合写真）

4 受講者レポート ①

■ Summer Program 2022 diary

QING Xin, CHUA Sherrene, GUAN Yifei, YIP Ren Wei, VOGT Alexander Bob

Day 1 – 16th September

Our first day started a bit earlier for me as I was scheduled for the breakfast shift. Due to this, Yuki (平井雄基) and I started preparing scrambled eggs, toast, bacon, and cut fruit for the whole team. Despite growing up in a large family, preparing food for 12 people is always a challenge. Luckily, everyone got enough to eat so we could start our first day energized and prepared for a lot of exploring. Our first checkpoint was next door to our accommodation at the Tokoro Research Laboratory (東京大学常呂実習施設). The lab consists of a local museum (東京大学常呂資料陳列館), and workspace for researchers from the University of Tokyo as well as local team members to conduct extensive anthropological and archaeological research. Within this facility, Kumaki-sensei greeted us with the warmest welcomes and opened our program with an introductory lecture on the Hokkaido region and how the area in Tokoro, located by the Okhotsk Sea, fits into the larger Japanese archipelago. Especially the explanation of the eras, from Paleolithic, Jōmon, Epi-Jōmon, and the Satsumon as well as Okhotsk cultures, were integral for understanding the unique

development the island of Hokkaido and its inhabitants have undergone since the Neolithic period. This included, but was not limited to, unique pottery and housing structures and remnants found in the area of the Tokoro River. Through this lecture, we were able to gain the necessary knowledge to comprehend the exhibits and stations throughout the week.

After Kumaki-san's lecture, he was kind enough to walk us through the attached museum, and explain the origin and significance of the artifacts. We were even privileged to watch local restoration experts restore Satsumon period pottery remains in the lab. Following this, we ended up exploring the area around the research center, taking a look at the reconstructions of local pit-dwellings. It was fascinating to step into one of these reconstructions, getting a glimpse of what life over a millennia ago was like on the island of Hokkaido.

In the Tokoro Archeological Museum (北見市 ところ遺跡の館), we were able to view a spatial reconstruction of time and history and were guided through the periods and cultures mentioned in Kumaki-san's lecture. Despite being a small, municipal museum, all exhibits featured an English interactive translation that could be accessed through our mobile phones. Thus everyone could follow regardless of their Japanese skills.

After the educational program, we ended up driving to Saroma Lake and decided to rent bikes and drive along the dunes between Saroma Lake and the Sea of Okhotsk. The lush, verdant hills framed by the lake with mountains, and the sea with its black shoreline were a sight that will be cherished for the years to come. After our hour-long bike tour,



博物館見学
(ところ埋蔵文化財センターにて担当講師の解説を受ける参加者)

4 受講者レポート ①



世界遺産 知床見学（オシンコシンの滝にて記念撮影）

we ended up returning to the lodge, where Charlie (QING Xin) and Fay (GUAN Yifei) prepared a delicious meal consisting of fried rice, cabbage, a tofu-tomato stew, and teriyaki chicken. After cleaning up, we ended up sitting in the kitchen and chatting and getting to know each other better. All in all, a good, and eventful day came to an end, with many more to follow.

(VOGT Alexander Bob)

Day 2 - 17th September

After a hearty and warm udon breakfast prepared by Charlie and Fay, we set off on our 2-hour road trip. Our destination was the Shiretoko Peninsula, a World Heritage site known for its virtually untouched landscapes and unique wildlife. On the way, we stopped by a few sites and museums, including a wild flower reserve (小清水原生花園) and Shiretoko Museum (斜里町立知床博物館).

The Shiretoko Museum was holistic and complete in the sense that it contained exhibits detailing both the natural wonders and the cultural history of the surrounding areas. We were able to learn not only about the bears, deer, foxes, eagles, and seals that are native to Hokkaido, but also how people across the ages learned to coexist with them. Personally, I really enjoyed seeing all the

specimens of animals and insects in the museum, because the vastness and diversity of the wildlife could be appreciated even though a lot of these animals are usually difficult to observe in the wild. We were also able to identify some smaller and more common animals like butterflies, deer, and certain birds while looking through the exhibition, which was fascinating.

I cannot retell the events of this day without mentioning our lunch. Hokkaido's reputation for seafood pushed my expectations quite high, but I wasn't disappointed at all. We were able to try several seafood dishes including *ruibe*, a traditional Ainu way of preparing salmon half-frozen. I personally didn't order *ruibe*, but someone described it as "*Ice cream and fish combined, in a good way*". All the seafood and fish melted in the mouth (literally, in the case of *ruibe*), and I was left very satisfied and ready to take on Shiretoko National Park.

Even though the weather wasn't really cooperating with us — it was raining intermittently throughout the day — getting to see some of the natural wonders of Shiretoko National Park was definitely my highlight of the day. The elevated walkway along the Shiretoko Goko Lakes really showcased the vast landscapes of Shiretoko,

all the way from the mountains to the sea, and the atmosphere was amazing. Luckily, when we arrived at Oshinkoshin Waterfall, the rain had stopped, so we were able to enjoy our time outdoors. Other than the natural environment of Shiretoko, I was impressed by the care and attention that was put into conserving the area from human influence; simple requests like being careful about bringing in 'alien species' from outside the park, or not straying from the set viewing paths. One day is not nearly enough to explore this vast area, and I would love to be back in the future!

(CHUA Sherrene)

Day 3 – 18th September

Early in the morning of the 18th, we visited the Abashiri Local Museum (網走市立郷土博物館). One of Eastern Hokkaido's oldest museums, it features archaeological materials unearthed by Kioe Yonemura, otherwise known for his discovery of the Moyoro Shell Mound, a central landmark in Abashiri. Towering seal taxidermies, metre-long sea turtles, a wealth of entomological specimens and a veritable treasure trove of Japanese household items fascinated us for hours - though our next destination, the Moyoro Shell Mound, would prove equally compelling.

True to its name, the Moyoro Shell Mound contains tens of thousands of shells and bones (human or otherwise), providing us with greater insight into the dietary habits of Hokkaido's erstwhile inhabitants as well as the variety and complexity of Hokkaido's marine fauna. Huddled together in the cold of an Ainu cabin replica, with sealskin lining wooden benches and pots of seafood bubbling on roaring fires, one could imagine the lives, replete with their liberties and privations, of the Ainu people in the late 1800s.

Our appetites for knowledge sated momentarily, we moved to fill our stomachs with fiery, melt-in-your-mouth wagyu beef curries at Bihoro Toge Pass, taking in its desolate

landscape as we negotiated rocky cliffs. We wondered how the inhabitants of Hokkaido were able to survive in this harsh climate, a question which only deepened as we moved on to explore the Bihoro museum, which functions as an ethnographic record of the local populace: who they were, how they lived and how they prospered through a combination of diligence, luck and human ingenuity.

As we looked through the exhibits, an answer emerged - a signpost, once hammered into the frosty ground of Bihoro Toge Pass. Though animals were few and far between in the pass, birds still glided by on gusts of wind, and ants still made their way steadily through the gravel. The wooden sign, weathered by the years and splintered in places by the biting cold, read: *life, nevertheless, prevails.*

(YIP Ren Wei)



博物館見学 (美幌博物館にて)

Day 4 – 19th September

We started the day with breakfast by Ren Wei and Yuma (菊池悠真) who served us warm vegetable chicken soup of rich flavours and some side dishes. Today's activities started off with a slightly different way since we met in the lab at Tokoro Fieldwork Station of the University of Tokyo to make comma-shaped beads (勾玉 *magatama*) in the morning. After that, we had a traditional Japanese-style bento box and set off for a fieldtrip to Yubetsu Museum (湧別町立郷土博物館ふるさ

4 受講者レポート ①



製作体験で完成した勾玉

と館JRY) in the afternoon.

Comma-shaped beads, or magatama in Japanese, is a curve shaped decoration made and worn by people in prehistoric Japan from the final Jomon period to the Kofun period. The comma-shaped beads back in those days were mostly made by jade and served as jewellery. Jade is a very hard type of stone. According to Professor Kumaki's introduction, its level of hardness (Mohs hardness) is typically 6.5-7 while the stone we used to make magatama is only 1. During the session, we used three pieces of sandpaper of different levels of roughness to shape and polish the stone we had and everyone ended up getting their own unique shape of magatama. This activity provided us with the hands-on experience of making what people in Hokkaido used to wear, and some of us were wearing the magatama we made throughout the day.

In the afternoon, we moved to a local museum called Yubetsu Museum. Unlike most of our museum visits where we explored the space ourselves, we were lucky enough to have the director of the museum introducing the exhibits in the museum throughout the tour. The exhibitions were mainly about the life of the first settlers from Honshu Island and their contribution to the development of Yubetsu. There were two types of settlers; one is called Tondenhei (屯田兵) whose shelters in Hokkaido are granted by the government, and the other type is the normal people who were motivated by the land policy and came here

by themselves. The land policy stated that as long as they cultivated and harvested from the farmland for five years they would become the owners of the land. Many of the first settlers succeeded and got their own land in Hokkaido five years later and the contributions they made have prospered the towns to date.

(GUAN Yifei)



博物館見学 (湧別町ふるさと館JRYにて学芸員の解説を受ける参加者)

Day 5 - 20th September

After days of gloomy weather, we finally welcomed beams of sunshine on the last day of our field trip and museum visit journey. The blue sky and ivory clouds worked quite well with the glass dome at the entrance of Hokkaido Museum of Northern Peoples (北海道立北方民族博物館), our first stop today. The interior of the museum was even more exquisite than the doorway: we were able to immerse ourselves in a diverse collection of craftwork and relics that tell compelling stories of the lives and memories of the northern cultures.

Before stepping into the dim corridor that worked like a time and space machine, taking me to parts of human civilization that I had little knowledge of, I had imagined that this would be another museum about the ethnic minorities living in northern Japan. Yet the first section on clothing quickly proved me wrong by presenting a large and well-explained collection of the clothes and accessories worn by populations not only in



博物館見学 (博物館網走監獄にて)

today's northern Japan but also in other regions of the far north. The rest of the exhibition on transport, diet, ritual practices, division of labor, etc., by the same token, introduced me to other aspects of the life of the northern people including but not limited to the Ainu, the Aleut, the Inuit, the Nanai, and the Northwest Coast Indians.

I really like the museum's comparative and inclusive approach to different northern cultures by presenting them together, providing substantial introductions side by side, so that the visitors get to compare their similarities and specificities on their own. Instead of conforming to the more convenient (but also rigid) division of culture and heritage narrative by contemporary geopolitical border lines and oceans, the design and scope of this museum retain much fluidity and ambiguity of the actual living experiences out there in the northern communities. This also points to new possibilities and responsibilities of contemporary archaeology which echo with the informative lecture delivered by Professor Simon Kaner--how can human civilizations of different time and space be studied not as lone islands but interconnected territories? How should we deal with established borders and categories that do not effectively describe the complex realities? In the afternoon, we visited the Abashiri Prison Museum (博物館網走監獄). Very excited

at first due to its popularity brought by the manga and anime series *Golden Kamuy*, I was soon terrified by the overly vivid human mannequins in the museum that intend to reproduce the everyday life in the prison. However, despite the weird figures and dramatic representation of the *tengoku* in the introductory film, the message of this historic site is still delivered: the dark histories behind prosperity of our times should not be forgotten, be that colonization, conflicts with the local population, excessive exploitation of human labor, etc. Underneath the romanticized veneer of the exploration era, countless corpses have paved the way for the blooming flowers and gigantic fortress of wood and iron in this now busy and commercialized tourist attraction.

(QING Xin)



サロマ湖の夕日を背景に集合写真

4 受講者レポート ②

■ テーマ別レポート

菊池悠真、佐藤諒、鈴木友芽子、平井雄基、福田ゆい

1. 埋葬と考古学

狩猟時代における北海道の埋葬方法には、本州のそれと比べて類似する点と特異な点が存在する。遺跡や時代ごとに多様性があるため一様に述べることは難しいが、要点を纏めたい。類似する点としては、屈葬が行われたこと、墓と住居の距離が近いことが挙げられる。特異な点としては、死と日没を同一視する考え方から、日没の方向(西~北)に頭部を向けて埋葬されること、遺体の顔に土器を置く被甕墓(かぶりかめぼ)が広く見られることが挙げられる。

考古学が対象とする時代は、このように墓や埋葬方法に研究の主眼が置かれる。そして、時代が進むにつれ、それらは研究の主たる対象から外れていく。その背景に文字史料の増加が考えられ、それによって万人が共有できる「歴史的事実」の構築が可能となっている。一方で、考古学が主に対象とする時代は物的史料の出土が最大の実事であって、人間の言行を直接に示すものは存在し得ない。衣食住を共にしていた人数ですら、居住空間の遺構から推測する他ないのである。

屈葬、埋葬方向、被甕墓にどんな意味があるのか、想像の域を出ない。一つの解釈をさも「歴史的事実」かのように語るのは忌避すべき行為である。他方で、「歴史的事実」へ漸近する意志は持ち続けねばならない。そのためには、亡人の住居や塚を土足で踏み躪り、彼の遺物を収奪する必要がある。考古学とは研究という大義の下に蛮行が許認される営みである。ただし、その蛮行は誠意あるものである。

遙か先を生きた亡人の墓前に思いを馳せ、持ちうる史料から往時を辿る。それは自らの想像力の産物であって、確かなものは何もない。ただ、名もなき亡骸の幾千年に渡る安眠を起こしてしまうという不遜が、想像に責任を持たせる。考古学の醍醐味は、罪咎と贖罪の連鎖に他ならない。

(文責：菊池悠真)

2. オホーツクの自然を支えるもの

このプログラムを通じて、自然および環境に関して多くの気づきがあった。空港に降り立った瞬間から、あえて意識しなくても空気の質の違いが一吸瞭然だったことに始まる。特に、水



常呂実習施設周辺の遺跡見学 (とこ遺跡の森の復元住居)



常呂実習施設周辺の見学 (ワッカ原生花園にて)

に関して多くの驚きがあり、宿泊所でいつもと同じ洗剤で洗濯してもいつもより洗濯物がいい匂いになったり、宿泊所の水道水がミネラルウォーターの味がしたり、お風呂でいつもと同じシャンプーで洗っても髪の毛がいつもと違ってさらさらになったり、手を洗うと驚くほど手がツルツルになったりした。シラカバやハマナス、コケモモやクマザサの群生、大きなドングリといった、東京とは異なる植生が身近に見られ、名前に「エゾ」を冠する茶色いアリがいて、大きくて動きの鈍い蚊がいて、多種の鳥が見られて…と、発見の連続だった。例えば、駒場のカラスは殺気立っていて今にも襲われそうな雰囲気があるが、北見のカラスは人に近寄ってくる気配すらなかった。

深いロシア愛をきっかけに北海道北部や東部に興味を持ったことからこのプログラムへ応募したが、今まで日本史も世界史も真面目に学んだことがなく、プログラム中の見学や講義を楽しみ理解できるか自信がなかった。でも、実際には当初の目的であった北海道におけるロシアとのつながりを見つけられたと同時に、考古学自体にも多くの生物学的な分析があったり、遺跡の周辺にはたいへい豊かな興味深い植生があったりして、生物学徒の私の好奇心は大いに刺激され、サイモン先生のおっしゃっていたように、考古学が他分野横断的な学問なのだとよくわかった。

日本の地方では、森林が放置されるようになってしまったために獣害が深刻化したり、災害への抵抗性が下がったりすることが問題となっているが、今回訪れた地方では、規則正しいシラカバの木立や電気線に囲まれていないピーツ畑、道にある「森は海の恋人 川は仲人」という看板を見ると、人々や地域社会における森林管理への意識が高く野生動物とも良好な関係が築かれている様子が窺えた。北海道の文明化が比較的最近であり、山林や野生動物の持続可能な利用の歴史が長かったことが要因の一つかもしれない。

自分は今まで自然豊かな田舎で過ごしたことがあると思っていたが、これほど大都会との距離が離れた場所に来たことは多くなかったかもしれないと気づいた。一方で、大都会との距離が比較的近い田舎の山林ほど管理されていないものも多く、

環境問題に関して我々が目を向けるべきは、限界集落のような本当の田舎というより、ある程度都会に慣れた人々が暮らす田舎なのだろうと思う。北海道で見られる、人々に感動を与えるような自然は、決して手放しになし得たありのままの自然ではなく、世界遺産や国立公園といったレベルで緻密に人の手が加えられた環境なのだと思えることは他地域の環境問題、持続可能な生き方を考えるにあたって深い洞察を与えるものであった。

(文責：福田ゆい)

3. 世界の終わりとトビニタイ

現代社会において異文化は、尊重しなければならない他者である。距離をとって節度を持って対峙すべき他者。異文化交流によって、文化の異なる者どうしが互いの差異を学ぶが、それは結局自分の文化の輪郭を浮き彫りにすることにつながる。境界の向こうに広がる異文化を境界の内側から見つめ、私は今の国際社会を生きている。

そんな私の気を引いたのは、北海道立北方民族博物館に展示されていたトビニタイの土器だった。紹介文には、「オホーツク文化は擦文文化に少なからず影響を与えながら、これとひとつになって終末を迎える」とある。何気ない一文だが、これは私の文化観を大きく揺るがした。片方の文化がもう片方を飲み込んでしまうのではなく、棲み分けをして併存するのでもなく、混ざり合ってひとつになる。現代社会の考え方だと、今そこにある文化は尊重し保全すべきであるので、このような融合は阻まれてしまうだろう。滅びゆくオホーツク文化を擦文文化の波から守ろうとするだろう。

でも、目の前にあるトビニタイの土器は美しい。文化が混ざり合い変容してゆく様を肯定しているかのようだ。擦文土器の形をしていながら、粘土の装飾はオホーツク土器のそれである。北の大地にゆっくり流れる時間の中で、2つの文化がダイナミックにぶつかり合って新たな形を生み出した、その感動がいつそう私にこの土器を美しく見せている。トビニタイに限った話ではない。倭人とアイヌの交流の中で流通した漆器やキセルも、北方文化の影響を受けた動物意匠も同様だ。きっと彼らは、自分達を「縄文人」「擦文人」「オホーツク人」「トビニタイ人」なんてカテゴリーに分けてはいなかっただろう。異文化に身構えることなく、いいなと思ったもの・その時支配的だったものを取り入れていった結果がこの北海道の歴史(先史)なのかもしれ



世界遺産 知床見学 (知床世界遺産センターにて)

れない。国境・境界に縛られず自由に影響を与え合い共鳴し合っ

て変わってゆく、北方民族ならではの文化衝突・融合に、私は新しい文化交流のあり方を見た気がした。

今の社会は国際社会である。インターネットや交通手段が進歩し、異文化人と関わる機会も大きく増えて、異文化との距離は大きく縮まった。かつての北海道のように、境界を気にせずに文化どうしが融合し合える地帯は近づいている。もしもいつか世界が終わるなら、そのとき我々は「ひとつになって終末を迎え」られるのだろうか？果たしてそれは理想的だろうか？答えはまだわからない。重要だが不毛な問いを胸にしまって、今日も私はサロマ湖に沈む夕日を振り仰ぐ。

(文責：佐藤諒)

4. 北海道開拓の陰と陽

考古学とは離れてしまうが、今日の北海道を形成した重要な要素として明治期の開拓があると考えられる。本プログラムでは、湧別町の開拓の礎である屯田兵の博物館「ふるさと館JRY」と旧網走刑務所の歴史的建物を保存展示している「博物館網走監獄」に訪れ、北海道の開拓の歴史についての理解を深めた。

屯田兵は北海道の北方警備と開拓のために明治時代に派遣された兵士のことを指す。日本の明治時代の歴史を学ぶ中で、屯田兵の存在はもちろん認識していた。しかし、明治期の数多くある政策の一つとして知っていたに過ぎず、今回でその理解を深められたと感じている。当時、17歳から25歳で身長150センチ以上という条件を満たした若者が北海道に5ヘクター



博物館見学 (斜里町立知床博物館にて)



世界遺産 知床見学 (知床五湖にて)

4 受講者レポート ②



博物館見学（網走市モヨロ貝塚館にて）

の土地を与えられ、その土地を5年以内に無事開拓したらその土地を私有化することができた。

「北海道の開拓と北方警備」、その言葉だけを聞いていたため、屯田兵は本州から突然極寒の地に行くことになってしまったという印象があったが、博物館の館長さんの話や展示を見ていの中で、実はある程度豊かな生活が送れていたのではないかとわかった。また、本州では当時なかなか私有地を得ることができなかったため屯田兵として志願し北海道に行くことは貧しさからの苦渋の決断というよりも、ゴールドラッシュでアメリカ西部を目指した人々のように「千載一遇のチャンス」という感覚だったのかもしれないと思った。実際、屯田兵は北方の警備という役割を開拓に加え与えられていたため、自主的に北海道に移住してきた開拓者よりも政府に守られ豊かな暮らしが保証されていた。北海道に来た時点で土地だけもらったわけではなく、家が用意され、米などの支給も受けていた。このように洗練された制度の甲斐あってか、湧別町では開拓が成功し今でも屯田兵の子孫が住んでいたり、一帯の土地にその名残があったりする。

アイヌ民族など北海道の先住民族にとってどれほどの影響があった政策かは定かでないが、今日の北海道にとって屯田兵は負の歴史ではなく、1つの成功体験だったのではないだろうか。

屯田兵と対照的に負の歴史として残っているのが網走監獄だという印象を受けた。明治時代初頭、政府は北海道開拓を急務としており、そのための労働力として本州から北海道に囚人たちが送りこまれた。網走監獄は1890年に開設された釧路集治監の外役所を指し、1200人の囚人が、網走から旭川



博物館見学（博物館網走監獄にて）

で繋がる中央道路の開削に当たり163キロを8カ月で完成させた。囚人たちにとって道路の開削は経験したことのない過酷な作業であっただけでなく、網走から離れるにつれて食糧の確保が難しくなった。その結果、多くの囚人や看守が犠牲となった。恥ずかしながら私は博物館網走監獄を訪れるまで北海道開拓に囚人たちが駆り出されていたことすら知らなかった。屯田兵は自らの土地を得るといったチャンスをもらっていたため政府との相互利益の中に成立していたが、網走の囚人たちは犯罪者であるが故に「悪人なのだから作業で死んでも悲しむ者もない、囚人の数が減れば監獄費の節約にもなる」とまで言われた。

私たちは今日、本州に住んでいても北海道から多くの恩恵を受けている。広大な農地が出来上がるその昔にはその土地を切り開いた屯田兵や名もなき囚人たちの存在があることをしっかりと胸に刻んでおきたい。

（文責：鈴木友芽子）

5. 「残す」と「遺す」

私は、考古学的遺跡を多く持つ島根県の出雲市の出身であるため、小さい頃から考古学に触れる機会が多く、強い関心を抱いてきた。かなり多くの遺跡や博物館を巡る本プログラムは、考古学的に要請される遺跡の保護と、一般の人に向けた考古学の普及・啓蒙の関係について考えを改める、貴重な機会となった。

まず2日目に、復元された竪穴式住居と発掘されたままの竪穴の跡を、ところ遺跡の森を訪れた際に見学した。私としては、再現された竪穴式住居については、ユニークな特徴がありつつも遺跡を損なっているように思えたが、竪穴の跡がたくさん並んでいるのは初めて見たため、考古学に触れ、先人の跡を想像することができた。またその後、網走市のモヨロ貝塚を訪れた際にも同じような体験をした。そこには発掘当時の貝塚はもう残っておらず、屋内施設に再現されたものが展示されているだけであった。一方、近くにはオホーツク文化特有の被覆墓がいくつか未発掘のまま土に埋まった状態で、甕が墓標のように土から顔を出しているのを観察することができた。ここで、私が中学生のときに修学旅行で沖縄の首里城を訪れた時のことも思い出した。私が感動したのは、復元された首里城ではなく、その下に埋まる首里城跡が見えた時であった。

しかし、ところ埋蔵文化財センターで遺物の保存の方法について触れた展示を発見した時に、遺物にはその劣化を防ぐための加工がさまざま施されているというのを知り、「遺物そのものを保存する」という価値観が虚構であると理解した。本プログラムでは留学生と行動を共にするが、私のような復元された遺跡モデルではなく遺構に興味を持つという人は、多数派ではないことに気づかされた。彼らは、復元模型に対して強い関心を示し、たくさんの写真を撮っていたのである。よく自省してみると、考古学に関心を持ったのは、家の近くに竪穴式住居の模型がある公園に遊びに行ったり、近所の博物館に展示されている出雲大社の再現模型を見たりして、心を動かされたところから始まっているのだということに回顧した。

確かに、多くの人に遺跡や博物館の展示で遺跡の面白さを伝えて普及することには、結局のところ遺跡保護と研究に対す

る理解、関心を集めることに繋がるのである。また、今回見学した竪穴式住居や貝塚といった考古学資料について、そもそも発掘研究が欠かせないのは当然なのである。考古学資料をただ「残す」のではなく、社会一般や後世に伝え広めるために「遺す」のが大切であると学んだ。遺跡の保護と考古学の啓蒙・普及は、互いが互いの目的でありながら時に対立するのである。そのバランスに留意しつつ、今後の考古学の発展を考えなければならない。

(文責：平井雄基)



博物館見学（湧別町ふるさと館JRYにて学芸員の解説を受ける参加者）

第8回夏期特別プログラムを終えて

第8回目となる文学部夏期特別プログラムが無事に終了した。いまだコロナ禍が続く中での実施ということで、昨年度同様、すでに来日している東大の学部留学生と、日本人の学部生を合わせて受講生とするプログラムとなった。昨年度の実施経験を活かせることは安心材料だったが、新型コロナ「第7波」の襲来があったため、今回も感染防止に心を砕くことになった。プログラムの受講生や関係者に感染が広がらなかったこと、またそれ以外にも事故や怪我などが発生しなかったことに安堵している。

今回のプログラムの特徴としては、PEAK(Programs in English at Komaba: 東京大学教養学部英語コース)の学生5名が参加したことが挙げられる。PEAK生たちの中には、他コースで学ぶ東大生と交流したい、また日本の歴史文化について現地で学びたいという意欲が強いということは以前より仄聞していたが、昨年度はPEAK関係者に文学部プログラムの情報が行き届いていなかったようなので、今年度は参加募集の報がPEAK生に確実に届くように努めた。その結果、実に多数の応募がPEAK生からあり、結果的に5名の参加が実現したのである。PEAK生と他の学部・学科で学ぶ学生たちとの交流に貢献できたことは、大きな喜びであった。

9月14日(水)から22日(木)に亘るプログラムでは、その活動の大部分を常呂にある文学部実習施設を拠点に展開した。座学や体験実習に加えて、文学部が学術交流協定を結ぶ英国セインズベリー日本藝術研究所のサイモン・ケイナー所長がオンライン講義を行う一幕もあった。日本の歴史文化遺産について語ってくれたケイナー所長は、世界遺産ストーンヘンジにて開催中の展覧会「Circles of Stone: Stonehenge and Prehistoric Japan」(開催期間:2022年9月から2023年8月)の立役者でもある。日英のストーンサークルという歴史文化遺産を通して両国をつなぐケイナー所長が、国際性あふれる受講生たちに英国から話しかける様子は、二重・三重の意味での国際交流だと感じた。

コロナ禍の不安が残る中、プログラムに参加して交流を遂げてくれた受講生たちに感謝する。彼らの感想や意見については、掲載している各自のレポートを参照されたい。

最後になりましたが、担当・参加・協力いただいた全ての教職員・TA・関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

東京大学大学院人文社会系研究科・准教授

松田 陽



東京大学大学院人文社会系研究科・文学部

東京大学大学院人文社会系研究科附属
北海文化研究常呂実習施設

〒093-0216 北海道北見市常呂町字栄浦376



東京大学 本郷キャンパス

〒113-0033 文京区本郷7-3-1

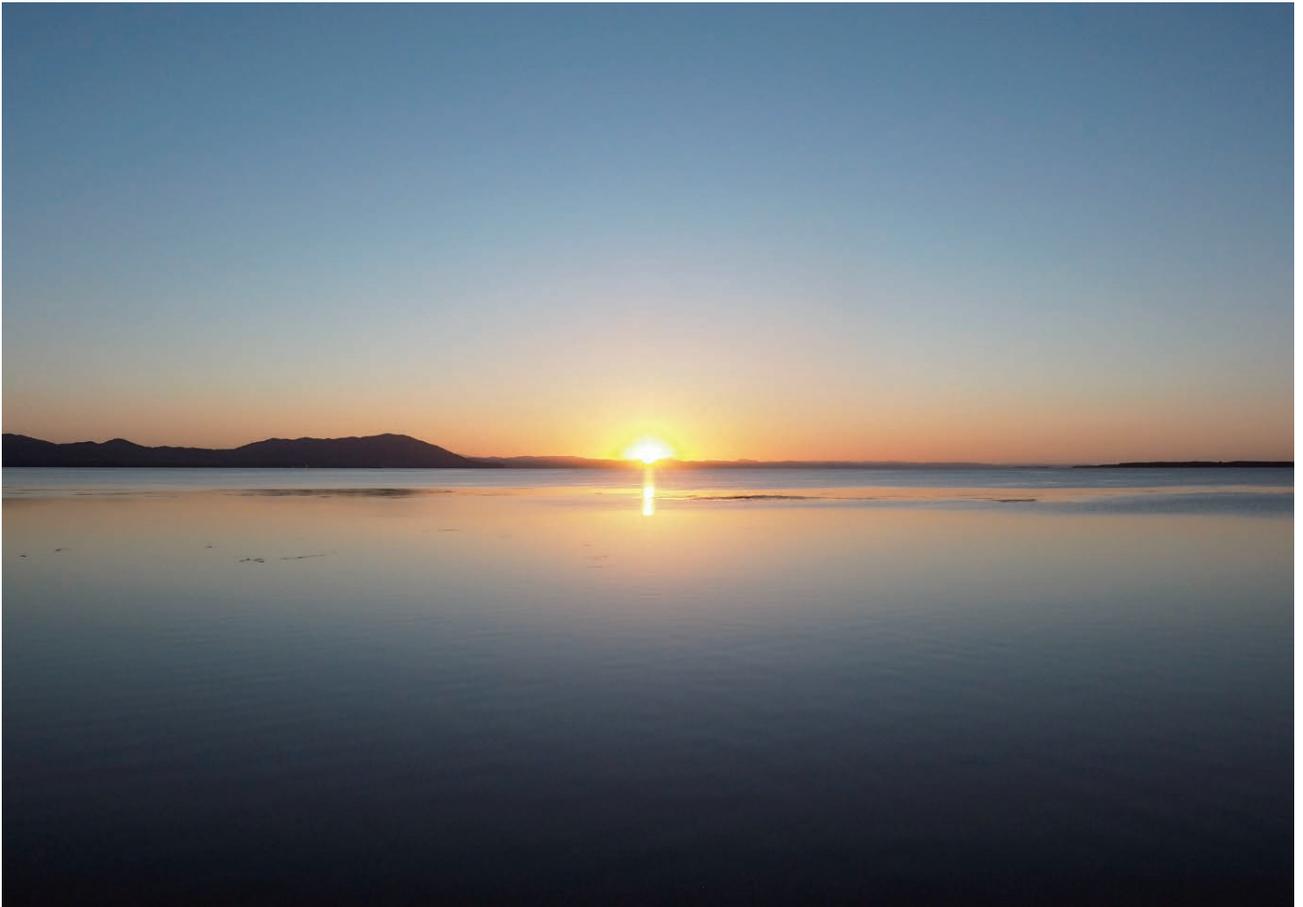


令和4年度
文学部夏期特別プログラム
(報告書)

編集発行 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

発行日 2022年12月16日

印刷 ヨシダ印刷株式会社



サロマ湖の夕日



卯原内サング草群落地

東大文

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/>



ワッカ原生花園を歩くエゾシカ